

習慣性を表す文における中国語のモダリティの“要”について

張 婷

关于惯常句里的汉语情态“要”

张 婷

摘 要

汉语里,用于惯常句里的“要”是认识情态的一种,但它并不能用“非现实”来加以说明。因为“要”可以用于过去或者现在的惯常性事态,而这些事态不属于非现实范畴。

认识情态的“要”虽然可以用于惯常句,但不能把它看作惯常性的标记。因为一个句子并不是因为使用了“要”而带有惯常性的,而是在受到其他表示事态反复意义的要素的影响下才带有惯常性。如果一个句子没有表示事态反复意义的要素,那么很容易发现“要”是很难带有惯常性意义的。

用于惯常句里的“要”对时间是泛指,它并不具体指定某个时间点。惯常句里的“要”也可以和表示推测的情态副词等共现,所以惯常句里的“要”是表示可能性意义的非断定形式。



目次

1. 研究背景

1.1. 習慣性を表す文における“要”とモダリティとの接点

1.2. 習慣性を表す文における“要”に関する研究の少なさ

1.3. 語学教育との関連

2. 先行研究

2.1. モダリティの“要”に関わる用法のバリエーション

2.2. 認識的モダリティの“要”との関わり

3. 習慣性を表す文における“要”

3.1. 「非現実」で説明できない“要”

3.2. “要”は習慣性のマーカーか

3.3. 習慣性を表す文における“要”をめぐる本稿の解釈

3.3.1. 時間点を指定しない“要”

3.3.2. 習慣性を表す文における“要”の意味

4. まとめ

5. 今後の課題

1. 研究背景

1.1. 習慣性を表す文における“要”とモダリティとの接点

習慣性(habitual)を表す文における“要”は中国語の早期の研究段階においてすでに問題として取り上げられている。例えば、雅洪托夫(陈孔伦译)(1959)において、“要”が繰り返される動作を表せるという記述があり(p. 72)、下記の例が挙げられている。

(1) 像这些快板, 李有才差不多每天要编。

(雅洪托夫 陈孔伦译 1959 p. 72)

こうした快板を、李有才はほとんど毎日創っている。(筆者訳)

(1) に対し、雅洪托夫(陈孔伦译)(1959)は“‘要’可能只是强调动作重复的规律性和必然性(この“要”は動作が繰り返される規則性と必然性を強調するだけであるかもしれない)”(p. 72)と説明している。雅洪托夫の説明にしたがえば、“要”は習慣性を表すと考えられそうである。

また、Lamarre, Christine (2007)において、“要”は習慣性を表すマーカーとされ(p. 102-103)、下記の例も挙げられている。

(2) 我一闻到辣的, 就要打喷嚏。

(Lamarre, Christine 2007 p. 103)

私は芥子の匂いを嗅ぐと、途端にくしゃみが出る。(筆者訳)

(3) 这一带一到夏天就要发洪水。

(Lamarre, Christine 2007 p. 103)

この一帯は夏になると、いつも洪水が起る。(筆者訳)

(4) 这个十字路口很危险, 每次出车祸都要死人。

(Lamarre, Christine 2007 p. 103)

この十字路はとても危険で、交通事故が起るたびに死者が出る。(筆者訳)

(2) ~ (4) の下線部について、Lamarre, Christine (2007) は、習慣性を表すマーカーの“要”が「非現実(irrealis)」を表す特徴があると見なし、中国語の「習慣性」をモダリティの範疇としている(p. 120-121)。このように、習慣性を表す文における“要”は中国語のモダリティ表現の一種であるとされることがある。

1.2. 習慣性を表す文における“要”に関する研究の少なさ

今までの研究を見渡すと、習慣性を表す文における“要”に関する研究は多く見られない。李敏(2009)において、中国語の習慣性表現については、まだ十分認識されていないと指摘されている(p. 71)。また、

劉琛琛(2013)においても、「今までの研究から見れば、中国語の習慣相に関する研究はかなり少ない」²と、明確に記されている(p. 52)。李敏(2009)も劉琛琛(2013)も“要”を習慣性表現の一種として見ているため、習慣性表現に関する研究が少ないという指摘は、習慣性を表す文における“要”がまだ明らかにされていないこととして理解できる。

習慣性を表す文における“要”はLamarre, Christine(2007)などで助動詞とされている。習慣性を表す文における“要”に関する研究の少なさはまた、助動詞研究の手薄さとも繋がっている。魯曉琨(1999)は、中国語の助動詞研究が手薄であると述べ、助動詞の研究の重要性を訴えている。魯曉琨の研究から、20年ほど経った現在、中国語の助動詞に関する研究は依然として手薄な領域である。助動詞の中でも、“要”に関する研究はほかの助動詞と比べると特に数が少ない。そのため、習慣性を表す文における“要”の研究は自ずと少ないのである。

助動詞研究の手薄さへの改善のためには、個々の助動詞を多くの実例に沿って深く研究することが何より重要である。習慣性を表す文における“要”の研究はその一環であり、この過程を通じて、“要”研究の手薄さの改善に寄与できると考える。

1.3. 語学教育との関連

助動詞は日本人学習者にとって、学習の難点の一つである(p. 165)と魯曉琨(1999)は指摘している。そして一部の多義的な助動詞の内部における語彙関係あるいはその区分は、学習者には難しいことを指摘している(p. 166)。刘月华等(2001)は、助動詞“要”は「願望」「義務」「可能性」「比較の文に用いられる推察」の意味を表すという(p. 175-177)。“要”は多義的であり、どの意味で用いられているか、学習者には把握が困難であるという問題がある。

また、刘月华等(2001)を含めて、吕叔湘主编(1999)などの研究においては、習慣性を表す文における“要”に関する記述がないし、“要”と同じく習慣性

を表す文に用いる“会”もあるという記述がLamarre, Christine(2007)や李敏(2009)などで見られるため、習慣性を表す文における“要”と“会”との区別が何か、中国語学習者が気になるだろう。このように、習慣性を表す文における“要”の研究が語学教育のためでも必要である。

2. 先行研究

中国語の“要”が習慣性を表す文に用いられるという記述が“要”の意味用法を分類するような従来の助動詞研究などでは、あまり見かけないが、多くの場合、習慣性を表す文における“要”がモダリティ研究の分野で取り上げられている。以下、重要な先行研究を概観してみる。

2.1. モダリティの“要”に関わる用法のバリエーション

モダリティの“要”に関わる用法のバリエーションは、助動詞研究などで言及されたことがある。例えば、吕叔湘主编(1999)や刘月华等(2001)がそれである。吕叔湘主编(1999)は、“要”の意味を下記のように分類している。

- 1) 表示做某事的意志。(吕叔湘主编 1999 p. 592)
あることを行う意志を示す。(菱沼透ほか 訳)
- 2) 须要; 应该。(吕叔湘主编 1999 p. 592)
…する必要がある。…すべきだ。
(菱沼透ほか 訳)
- 3) 表示可能。(吕叔湘主编 1999 p. 592)
可能性があることを表す。(菱沼透ほか 訳)
- 4) 将要。(吕叔湘主编 1999 p. 593)
もうすぐ…するだろう。(菱沼透ほか 訳)
- 5) 表示估计, 用于比较句。
(吕叔湘主编 1999 p. 593)
推察を表す。比較の文に用いる。
(菱沼透ほか 訳)

呂叔湘主編(1999)は“要”の意味用法を5つに分類したが、“要”が習慣性を表す用法については言及していない。劉月華等(2001)は“要”に対し、呂叔湘主編(1999)とやや異なる分類をしている。

- a) 表示有做某事的意愿。(劉月華等 2001 p. 175)
何かを行う意志・願望があることを表す。
(筆者訳)
- b) 表示事实上或情理上的需要, 有“应该、须要”的意思, 多用于未然的情况。
(劉月華等 2001 p. 176)
事実上あるいは条理上の必要性を表し、“应该”“须要”の意味を有する。未然の状況に多用する。
(筆者訳)
- c) 表示“可能”、“会”的意思, 但语气比“可能”、“会”更肯定。(劉月華等 2001 p. 176)
“可能”“会”の意味を表すが、語気は“可能”“会”より更に肯定的である。(筆者訳)
- d) 用来表示一种看法、估计, 用于比较句。
(劉月華等 2001 p. 177)
ある種の見解・推察を表し、比較の文に用いる。
(筆者訳)

劉月華等(2001)は“要”の意味用法を上記のように4つに分類するが、呂叔湘主編(1999)と同じく、“要”が習慣性を表す用法については言及していない。このように、モダリティの“要”の用法のバリエーション研究において、習慣性用法について言及されないのは、これが主要な用法とは見なされていないことを示すものであると言える。

2.2. 認知的モダリティの“要”との関わり

習慣性を表す文における“要”はモダリティとの関わりが深い。習慣性の意味とモダリティとの関連はすでに様々な先行研究で論じられてきた。例えば、Comrie, Bernard (1985)に下記のような記述がある。

More generally, habitual meaning lies on the boundary of the three systems of tense, aspect, and mood. (Comrie, Bernard 1985 p. 40)

より一般的に言って、習慣性の意味はテンス、アスペクト、モダリティの三つの体系の境界にある。(久保修三 訳)

Comrie, Bernard (1985)の説明から、習慣性の意味はモダリティの範疇だけに属さないが、モダリティと関係を持っていることが分かる。Comrie, Bernard (1985)と異なり、Lamarre, Christine (2007)は習慣性をテンス・アスペクト・モダリティの三つの体系に跨がるものではなく、モダリティ範疇だけのものとしている。そのうえ、Lamarre, Christine (2007)は“要”を習慣性のマーカーとし、認知的モダリティの一種であると述べている(p. 121)。

Comrie, Bernard (1985)とLamarre, Christine (2007)の記述から分かるように、“要”が積極的に習慣性のマーカーとして機能しているかどうかはともかく、習慣性を表す文における“要”はモダリティと関わりが深いと言える。

“要”のモダリティ用法について、彭利貞(2007)は「動的モダリティ」「義務的モダリティ」「認知的モダリティ」の三種の用法に分類し、それぞれ「意志・願望」「義務」「必然性」を表すと説明している(p. 137)。認知的モダリティとしての“要”が「必然性」を表すかについては疑問があるが、“要”に三種のモダリティ用法があることは確かである。

一般言語学において、小嶋美由紀(2015)は認知的モダリティについて、「事態に対する話し手の判断に関連し、可能性や必然性を意味する」(p. 222)と説明している。先行研究に挙げられた用例を見ると、習慣性を表す文における“要”は小嶋美由紀(2015)が定義した認知的モダリティとして解釈されやすいことが分かる。例えば、以下の例がある。

- (5) 我一闻到辣的, 就要打喷嚏。

(Lamarre, Christine 2007 p. 103)

私は芥子の匂いを嗅ぐと、途端にくしゃみが出る。
(筆者訳)

(6) 这一带一到夏天就要发洪水。

(Lamarre, Christine 2007 p. 103)

この一帯は夏になると、いつも洪水が起こる。

(筆者訳)

(7) 人总是要死的。(荒川清秀 2003 p. 201)

人は必ず死ぬものだ。(荒川清秀 訳)

(8) 每天晚上我爸爸都要喝一点儿酒。

(荒川清秀 2003 p. 201)

每晚父はお酒を少し飲むのを習慣にしています。
(荒川清秀 訳)

(5) (6) は 1.1. で現れた用例を再掲したものである。Lamarre, Christine (2007) は (5) (6) について、「くしゃみが出ること」「洪水が起こること」がコントロールできない現象であると述べている (p. 108)。「意志・願望」はコントロールできる行為に関する意味であるから、(5) (6) の“要”は「意志・願望」を表す「動模ダリティ」として解釈されにくいのである。

(7) の“要”については、荒川清秀 (2003) は「一種の趨勢」(p. 200)を表すと説明している。この趨勢も「事態に対する話し手の判断」と関わるため、この“要”も認識的モダリティとして理解できる。

(5) ~ (7) の“要”の後に非制御性動詞を用いているのに対し、(8) “要”の後に制御性動詞を用いている点で、“要”の後の動詞の性質が異なるが、(8) の“要”については、荒川清秀 (2003) は「習慣的なことがら」(p. 201)に使っていると述べている。また、荒川清秀 (2003) が (8) の“要”を「可能性・蓋然性を表すグループ」(p. 195)のものに入れて論じていることから、(5) ~ (7) と同じく、(8) の“要”も認識的モダリティとして解釈するほうが適切であると言える。

このように、“要”の用法のバリエーションにおいて、“要”の習慣性用法は先行研究であまり言及されておらず、主要な意味用法ではないのである。また、習慣性を表す“要”はモダリティと関係深く、認識的モダリティの一種であると言える。認識的モダリティ

の“要”に関する先行研究が少ないため、習慣性を表す文における“要”の働きもまだ十分明らかにされていないと言える。

3. 習慣性を表す文における“要”

3.1. 「非現実」で説明できない“要”

習慣性を表す文における“要”は認識的モダリティの一種であることが先行研究で説明されてきた。認識的モダリティは可能性や必然性などを意味するため、「非現実 (irrealis)」を表すという見解もある。「非現実」について、Comrie, Bernard (1985) は下記のように記している。

Some languages have a basic modal distinction between realis and irrealis, where realis refers to situations that have actually taken place or are actually taking place, while irrealis is used for more hypothetical situations, including situations that represent inductive generalisations, and also predictions, including also predictions about the future. (Comrie, Bernard 1985 p. 45)

現実相と非現実相の間に基本的なモダリティの区別をもつ言語がある。そこでは、現実相は実際に起こった、または実際に進行中の状況に言及するのに対し、非現実相はより仮定的な状況に使われ、それには推測や帰納的一般化による状況が含まれ、推測には未来についての予測も含まれる。
(久保修三 訳)

Comrie, Bernard の記述から分かるように、「非現実」は仮定的な状況、推測などについて言及するものである。認識的モダリティの“要”は Comrie, Bernard の記述の影響で、「非現実」を表すと考える研究がある。そのため、習慣性を表す文における“要”は認識的モダリティとして、「非現実」を表すという見解がある。加えて、李敏 (2009) は中国語の「習慣性」がある比較的特殊な「非現実」の範疇であると述べている (p.

72)。

しかし、習慣性を表す文における“要”は過去のこともにも使える。李敏(2009)は習慣性表現が過去の事態にも現れることを認めながら、習慣性表現を「非現実」とする。“要”を含む用例を詳しく見ると、「習慣性」と「非現実」は互いに矛盾している概念と言わざるを得ない。例えば、以下の例を見られたい。

(9) 以前、一下暴雨，这条小河就要涨水。(筆者作)
以前は、一度大雨になると、この小川はすぐ水位が上がった。(筆者訳)

(10) 之前候车长廊没有顶篷，大夏天的在这里等车常要暴晒好几分钟，…。(Sketch Engine)
かつてバスの待合所の長い廊下には屋根がなく、真夏にここでバスを待つと、何分間も日に晒されたままになったものだ。(筆者訳)

(11) 古时扫墓，孩子们还常要放风筝。(Sketch Engine)
昔は、墓参りになると子供たちがよく風揚げをしたものだ。(筆者訳)

(9)～(11)はすべて過去の出来事を描いている。これらの例に使われる“要”は習慣性を表す文に使われている。Comrie, Bernard の上記の記述にしたがえば、過去の出来事は「現実」に属することになる。そうであれば、(9)～(11)の“要”は「非現実」を表すとは言えない。

また、一般言語学で、習慣性を「習慣相」と見なす場合もある。習慣相に対し、野田高広(2015)は「同一タイプの事態の複数場面での繰り返し」(p. 5)と「恒常的な事態」(p. 5)を表すものであると説明している。例として、野田高広氏は下記の例を示している。

(12) 彼は毎朝 6 時に起きる。(野田高広 2015 p. 5)

(13) ここ 10 年ほどジョギングをしています。(野田高広 2015 p. 5)

(14) 水は 100 度で沸騰する。(野田高広 2015 p. 5)

(15) 地球は太陽の周りを回っている。

(野田高広 2015 p. 5)

(12) は 6 時に起きるという事態が毎朝という複数の場面で繰り返している。(13) も同じように、ジョギングするという事態がここ 10 年で繰り返している。(14) (15) は恒常的な事態である。野田高広氏の「習慣相」は劉琛琛(2013)で言及した「習慣相」と同じように、本稿の言う「習慣性」に当たる。野田高広氏の説明から分かるように、習慣性を表す文における“要”は現在や未来の繰り返す事態、あるいは恒常的な事態に使える。

(16) 我们生在一个资讯的时代，每天都要接触大量的文件和资讯。(Sketch Engine)

我々は情報化の時代に生きており、毎日大量の文書や情報に触れている。(筆者訳)

(17) 水在摄氏零度以下就要结冰。(Sketch Engine)
水は摂氏零度以下になると、氷になる。(筆者訳)

(16) の“要”は現在の繰り返す事態に使われ、(17) の“要”は恒常的な事態に使われている。(16) (17) を見ても、“要”は「非現実」を表しているとは言えない。

以上のように、習慣性を表す文における“要”は認識的モダリティの一種であるが、「非現実」で説明することができないのである。

3.2. “要”は習慣性のマーカーか

1.1. や 2.2. で言及したように、Lamarre, Christine (2007) は、“要”が習慣性を表すマーカーとしていいる。今までの用例を見れば、“要”は確かに習慣性を持つ文に使われ、習慣性を表しているように見える。しかし、“要”が習慣性を表す文に使えるからと言って、習慣性を表すマーカーになるとは断定できない。

- (18) 从7月份开始, 印度洋季风到来, 雨季开始, 几乎每天都要下一场雨, 带走一些暑热。

(Sketch Engine)

7月からインド洋のモンスーンが到来すると雨季が始まり、ほぼ毎日雨になって、少し暑さを連れ去ってくれる。

(筆者訳)

- (19) …人们在登山时, 常常要借助这些微小的缝隙作为支点, 一点点向上攀登。

(Sketch Engine)

人々は、山に登る時よくこれらの僅かな隙間を支えとし利用し、少しずつ登っていくのだ。

(筆者訳)

- (20) 以前, 一下暴雨, 这条小河就要涨水。

以前は、一度大雨になると、この小川はすぐ水位が上がった。

(筆者訳)

- (21) 水在摄氏零度以下就要结冰。

(Sketch Engine)

水は摂氏零度以下になると、氷になる。

(筆者訳)

(18)～(21)の“要”がもし習慣性を表すマーカーならば、これらの文はこのマーカーを使わなければならないはずである。しかし、これらの例はすべて“要”を用いなくてもよい。この事実から、これらの文で習慣性の意味を表しているのは“要”ではないと言える。

安藤貞雄(1986)は日本語のル形(終止形に当る)が「現在の習慣的行為」(p. 181)を表す意味があるということを分析する際、「『習慣』の意味を積極的に表しているのは、文中に共起する『タイテイ』『トキドキ』のような繰り返しを示す副詞語句」(p. 181-182)であると論じている。安藤貞雄氏の分析は習慣性を表す文における“要”にも適応できる。つまり、“要”が習慣性を表す文に用いられるということは、文中にはほかの繰り返しを示す要素が“要”に影響をもたらしているためである。

例えば、(18)の“每天”“都”、(19)の“常常”は繰り返しを示す語である。このほかに、(20)の“以前”は過去の事態が繰り返す時間幅を示せる語である。また、(19)にある“人们在登山时”の“…时”や、

(20)にある“一下暴雨…就”の“一…就”、(21)にある“水在摄氏零度以下”は事態が繰り返す条件を示す表現である。“要”を含む文はこれらの繰り返しを示すような要素と共起してはじめて、習慣性的意味を表せるようになる。逆に、これらの繰り返しを示す要素がなければ、“要”は習慣性を表すと言いにくなる。

- (18') 从7月份开始, 印度洋季风到来, 雨季开始, 几乎要下一场雨, 带走一些暑热。

(筆者作)

7月からインド洋のモンスーンが到来すると雨季が始まり、ほぼ毎日雨になって、少し暑さを連れ去ってくれる。

(筆者訳⁵)

- (19') 登山要借助这些微小的缝隙作为支点, 一点点向上攀登。

(筆者作)

山に登るには、これらの僅かな小さい隙間を支えとして使い、少しずつ登っていく必要がある。

(筆者訳)

- (20') 这条小河要涨水。

(筆者作)

この小川は増水するだろう。

(筆者訳)

- (21') 水要结冰。

(筆者作)

水は氷りつくものだ。/ 水が凍りそうだ。

(筆者訳)

(18')～(21')は(18)～(21)に基づいて作成した用例である。(18)において事態の繰り返しを示す“每天”“都”という要素を抜くと、文が不自然になる。“要”が習慣性のマーカーならば、(18')は“每天”“都”がなくても、文が不自然にならないはずである。

(19')(20')の文中は事態の繰り返しを示す要素がない。そうすると、この二例にある“要”は習慣性を表せない。もし、“要”が習慣性のマーカーならば、(19')(20')は事態の繰り返しを示す要素がなくても、“要”だけで習慣性を持つ文が成立するはずである。

(21')は、文中に事態の繰り返しを示す特定な文脈がないため、文が多義的になる。文は習慣性を指すか、事態が発生しそうな状況を指すか、確定できない。もし、“要”が習慣性のマーカーならば、(21')

には多義性が生じないはずである。

以上、(18)～(21)は文中の事態の繰り返しを示す要素がないと、文が不自然になったり、文の意味が変わったりすることになる。つまり、積極的に習慣性を表すのは、“每天”“都”“常常”などの繰り返しを示す語や、事態が繰り返す条件を示す表現などという要素である。言い換えれば、“要”は積極的に習慣性を表すものではないのである。したがって、“要”は習慣性を表すマーカーだとは言えないのである。

3.3. 習慣性を表す文における“要”をめぐる本稿の解釈

3.2.で“要”は習慣性を表すマーカーだとは言えないことを指摘した。さて、習慣性を表す文における“要”は習慣性のマーカーでなければ、どのような機能を持っているのだろうか。以下、習慣性を表すとされる“要”の機能について詳しく論述する。

3.3.1. 時間点を指定しない“要”

王晓凌(2009)は「習慣性」について、下記のように述べている。

惯常是一个边缘语法范畴，在情态范畴中，它处在现实与非现实中间的位置，不完全属于一方，也不完全属于另一方，但又跟双方都沾一点边。

(王晓凌 2009 p. 115)

「習慣性」は周辺的な文法範疇であり、モダリティ範疇においては「習慣性」は「現実」と「非現実」の中間にあって、完全には一方には属さないし、もう一方にも完全には属さないが、双方に繋がりを持っている。(筆者訳)

「習慣性」は「現実」と「非現実」の中間に位置付けるという記述から、王晓凌氏は「習慣性」と「現実」「非現実」を同レベルのものであると見ていることが分かる。しかし、両者は完全に異なるレベルの概念で

ある。「現実」「非現実」はある具体的な時間を点的に指定し、事態を述べる場合があり得るのに対し、「習慣性」はある具体的な時間を点的に指定しない。

(22)可能要下雪，但无论如何我都要进城。

(Sketch Engine)

雪になるかもしれないが、何がどうあっても私は町に行かねばならない。(筆者訳)

(23)昨天一直刮东风，山里要下雨。(Sketch Engine)

昨日からずっと東の風が吹いているから、山は雨が降るだろう。(筆者訳)

(24)每年的春夏交替之际，电工班总是要忙个不停。

(Sketch Engine)

毎年、春から夏への変わり目には、電気工事班はいつもずっと忙しいものだ。(筆者訳)

(25)…这些信她是看了一遍又一遍，每看一次，就要流一次眼泪。(Sketch Engine)

彼女はこれらの手紙を何度も繰り返し読み、読む度に涙を流した。(筆者訳)

(26)水在摄氏零度以下就要结冰。(Sketch Engine)

水は摂氏零度以下になると、氷になる。

(筆者訳)

(22)(23)の“要”はいわゆる「非現実」を表すものである。(22)(23)において、「雪が降ること」「雨が降ること」が未来のある時点で起こる可能性がある判断されている。つまり、(22)(23)にあるいわゆる「非現実の事態」が未来という具体的な時間に現れるものである。このいわゆる「非現実の事態」が未来という時間において繰り返して発生するのではなく、事態が未来のある点で現れるため、「非現実」は「ある具体的な時間を点的に指定することがあり得る」というわけである。

それに対し、(24)～(26)の“要”は習慣性を表す文に用いている。(24)(25)は過去・現在・未来の時間軸において、複数の場面で「忙しくて止まらないこと」「涙がこぼれること」が起きる。つまり、「忙しくて止まらないこと」「涙がこぼれること」が一回だけ

で生起することではなく、過去・現在・未来のいずれにおいても複数回生起するという習慣的な事態である。(26)は「水は摂氏零度以下になると氷になること」が恒常的なことであり、条件さえ満たせば複数回に生起する習慣的な事態である。(24)～(26)の事態は具体的なある時間点で現れるものではない。

以上のように、「習慣性」は「非現実」と異なるレベルの概念である。「習慣性」はある具体的な時間点を指定しないため、習慣性を持つ文は時間性から解放されており、習慣性を表す文における“要”も同じく時間性から解放されていると考えられる。

3.3.2. 習慣性を表す文における“要”の意味

習慣性を表す文における“要”はモダリティ表現であり、文によって“要”を使用しなくてもよい場合もある。“要”を使用しない場合、ほかのモダリティ表現がなければ、文は断定的になる。

(27)a. 水在摄氏零度以下就要结冰。(Sketch Engine)

水は摂氏零度以下になると、氷になる。

(筆者訳)

b. 水在摄氏零度以下就结冰。(筆者作)

水は摂氏零度以下になると、氷になる。

(筆者訳)

(28)a. …这些信她是看了一遍又一遍，每看一次，就要流一次眼泪。(Sketch Engine)

彼女はこれらの手紙を何度も繰り返し読み、読む度に涙を流した。

(筆者訳)

b. …这些信她是看了一遍又一遍，每看一次，就流一次眼泪。(筆者作)

彼女はこれらの手紙を何度も読んだ。読む度に、涙がこぼれた。

(筆者訳)

(29)a. 每年的春夏交替之际，电工班总是要忙个不停。

(Sketch Engine)

毎年、春から夏への変わり目には、電気工事班はいつもずっと忙しいものだ。(筆者訳)

b. 每年的春夏交替之际，电工班总是忙个不停。

(筆者作)

毎年、春から夏への変わり目には、電気工事班はいつもずっと忙しい。(筆者訳)

(27)～(29)は、“要”の有無によってニュアンスが異なる。(27a)～(29a)はモダリティの“要”があって非断定的な述べ方であるのに対し、(27b)～(29b)は“要”がなく、断定的な述べ方である。このニュアンスの違いは、日本語におけるダ(確言的断定)とダロウなどのモダリティ形式を用いる場合との差異に類似している。

寺村秀夫(1984)は日本語のダとダロウの違いについて、下記のように説明している。

ダロウが主観性の強い表現だということは、先にも述べたように、それがラシイやヨウダと違って、判断の客観性を相手にほめかすという意識がないという点にも現れている。およそ推量をするのに全く根拠がないということはふつうはないわけであるが、ダロウという形で推量の表現をするのは、その根拠が自分個人の知識や経験だけによる場合で、その点で結局は確言的な断定のダと大して変わらないともいえる。

(寺村秀夫 1984 p. 229 下線は張婷)

上記の説明から、ダロウは根拠を持った推量であって、その根拠が話し手の知識や経験による場合で、断定のダと大して変わらないということが分かる。“要”がある(27a)～(29a)はダロウを用いる述べ方と類似し、“要”がない(27b)～(29b)は断定のダを用いる述べ方と類似する。つまり、(27a)～(29a)の“要”は話し手の知識や経験による推量(可能性)判断であるのに対し、“要”がない(27b)～(29b)は述詞成分による確言的な断定である。

しかし、(27a)～(29a)の“要”は習慣性を持つ文に用いているのに、なぜ可能性判断を表すのだろうか。齊沪扬主编(2011)は下記の例を挙げている。

(30) 人一天可能要掉 50 根头发。

(齐沪扬主编 2011 p. 455)

人間は一日 50 本の髪の毛が抜けるものなのかもしれない。(筆者訳)

(30) の“要”は“可能”と共起し、習慣性を持つ文に用いている。この“要”に対して、齐沪扬主编 (2011) は“可能”“也许”と並べて共起する場合、状況に対する推測や推察を表すと説明している (p. 455)。齐沪扬主编 (2011) の解釈にしたがえば、習慣性を表す文における“要”は推測を表すことになる。また、習慣性を表す文における“要”が「不確かであること」を意味する“可能”と共起できるため、習慣性を表す文における“要”は可能性判断である推測を表していると言える。習慣性を表す文における“要”が可能性的な推測を表すということは、“要”が非断定的な述べ方であるということと等しい。

(30')a. 人一天要掉 50 根头发。(筆者作)

人間は一日 50 本の髪の毛が抜けるものだ。(筆者訳)

b. 人一天掉 50 根头发。(筆者作)

人間は一日 50 本の髪の毛が抜ける。(筆者訳)

(30') は (30) に基づいて作成した用例である。(30' a) も (30' b) も習慣性を表す文である。(30) の“要”が非断定的な述べ方であり、“可能”と共起しないと意味が変わると考えられないため、(30' a) の“要”も同じく可能性を表した非断定的な述べ方になる。(30' b) は“要”がないため、(27b) ~ (29b) と同じように、断定的な述べ方になる。

また、習慣性を表す文における“要”は非断定的な述べ方であるという性質を、“要”と共起する“也许”“恐怕”などのモダリティ副詞からも証明できる。

(31) 喜爱旅游的你也许常常要遭遇这样的场景。

(Sketch Engine)

旅行好きなあなたならよくこういう場面に出会うかもしれませんね。(筆者訳)

(32) 后市恐怕每周要发生一次大震荡, ……。

(Sketch Engine)

今後の(株式)市場では、おそらく週に 1 度は大きな変動が起こることになるだろう。

(筆者訳)

(31) も (32) も習慣性を持つ文である。(31) の“要”は“也许”と共起し、(32) の“要”は“恐怕”と共起している。曹泰和 (2014) は“也许”“恐怕”を「推測の語気」に分類している (p. 27)。曹泰和氏の「推測の語気」にある副詞は本稿の言う推測を表したモダリティ副詞のことである。習慣文における“要”が断定的な述べ方ならば、“也许”“恐怕”などの推測を表したモダリティ副詞と共起できないはずである。なぜならば、断定は「確かであること」についての述べ方であるのに対し、推測は「不確かであること」についての述べ方であるためである。「断定」と「推測」は相容れないため、習慣文における“要”が推測を表したモダリティ副詞と共起できることは、“要”が可能性を表す非断定的な述べ方であるしか考えられないのである。

4. まとめ

習慣性を表す文における“要”は認識的モダリティの一種であるが、「非現実」という概念で説明できない。なぜなら、過去・現在の習慣的事態は「非現実」とは言えないからである。

また、“要”は習慣性を表す文に用いるからと言って、習慣性のマーカーになるとは言えない。それは、習慣性を積極的に表しているのは文中にある“每天”“都”“常常”などの繰り返しを示す語や、事態が繰り返す条件を示す表現などという要素であるためである。“要”は習慣性を表すものではないのである。

習慣性を表す文における“要”はある具体的な時間点を指定しないため、時間性から解放されている。そ

のうえ、習慣性を表す文における“要”は非断定的な述べ方であり、「可能性」を表している。

5. 今後の課題

モダリティの“要”はすでに先行研究で紹介したように、様々な意味を持っている。習慣性を表す文における“要”は認識的モダリティの一種であり、同じく認識的モダリティとして、習慣性を表す文に用いていない、「可能性」を表す“要”と最も関連している。両者とも認識的モダリティであるため、意味合い的に連続性を持っているはずである。しかし、両者はどのように連続性を成しているかはまだ明らかにされていない。

このほかに、モダリティ表現の中で、習慣性を表す文に使用できる“要”以外、“会”も習慣性を表す文に使える。これは Lamarre, Christine (2007) や李敏 (2009) などでも言及されている。習慣性を表す文における“要”と“会”は多くの場合、互いに置き換えられる。

- (33)a. 在瓷器上作画, 并不顺畅, 画起来常常要耗费很多的时间。 (Sketch Engine)

磁器の上に絵を描くのは筆が滑らかに運ばず、描くのに多くの時間を費やしてしまうものだ。 (筆者訳)

- b. 在瓷器上作画, 并不顺畅, 画起来常常会耗费很多的时间。 (筆者作)

磁器の上に絵を描くのは筆が滑らかに運ばず、描くのに多くの時間を費やしてしまうこともしばしばだ。 (筆者訳)

- (34)a. …天总要黑, 人总要离别! (Sketch Engine)

日は必ず暮れるもの。人は必ず別れ別れになるもの。 (筆者訳)

- b. …天总会黑, 人总会离别! (筆者作)

日はきっと暮れるときが来る。人はきっと別れが来る。 (筆者訳)

(33a)の“要”は(33b)の“会”と、(34a)の“要”は(34b)の“会”と置き換えられる。この二例にある“要”と“会”は習慣性を表す文に使えるという点では同じであるものの、相違点もあるはずである。しかし、この相違点は何か、中国語学界では依然として不明な部分が多い。以上のような問題点が今後の研究課題として残されており、モダリティの更なる研究が必要である。

注

- 1 雅洪托夫(陈孔伦译)(1959)から引用した説明の日本語訳は筆者によるものである。
- 2 劉琛琛(2013)にある「習慣相」は、本稿の言う「習慣性」に当たる。
- 3 吕叔湘 主编(菱沼透ほか訳)(2003)による訳文である。以下同様。
- 4 コムリー、バーナード(久保修三訳)(2014)による訳文である。以下同様。
- 5 (18)は“每天”“都”という繰り返しを示す語を消した後、文が不自然になるため、(18')の訳文は正用例(18)の訳文を用いている。

参考文献

- 荒川清秀 (2003) 『一步すすんだ中国語文法』大修館書店
- 安藤貞雄 (1986) 『英語の論理・日本語の論理：対照言語学的研究』大修館書店
- 小嶋美由紀 (2015) 「モダリティ」斎藤純男・田口善久・西村義樹 編『明解言語学辞典』三省堂 pp. 222- 223
- コムリー、バーナード (久保修三訳) (2014) 『テンス』開拓社
- 曹泰和 (2014) 「副詞」沖森卓也・蘇紅 編著『日本語ライブラリー：中国語と日本語』朝倉書店 pp. 21- 28
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 野田高広 (2015) 「アスペクト (相)」斎藤純男・田口善久・西村義樹 編『明解言語学辞典』三省堂 pp. 4- 6
- 劉琛琛 (2013) 「有標的な中国語の習慣相に関する一考察：日本語との対照を兼ねて」『ありあけ：熊本大学言語学論集』第 12 巻 熊本大学文学部言語学研究室 pp. 51- 62
- 魯曉琨 (1999) 「現代中国語助動詞意味研究の現状及び問題点：現代中国語助動詞意味研究の方法を重ねて」『文京女子大学研究紀要』第 1 巻第 1 号 文京女子大学総合研究所 pp. 163-174
- 呂叔湘 主編 (菱沼透ほか訳) (2003) 『中国語文法用例辞典：《現代漢語八百詞増訂本》日本語版』東方書店
- Lamarre, Christine (2007) 〈汉语里标注惯常动作的形式〉張黎等 編《日本現代漢語語法研究論文選》北京語言大學出版社 pp. 101-124
- 李敏 (2009) 〈現代漢語習慣體分析〉《寧波大學學報：人文科學版》第 22 卷第 6 期 寧波大學 pp. 71-75
- 劉月華等 (2001) 《實用現代漢語語法 (增訂本)》商務印書館
- 呂叔湘 主編 (1999) 《現代漢語八百詞 (增訂本)》商務印書館
- 彭利貞 (2007) 《現代漢語情態研究》中國社會科學出版社
- 齊滄揚 主編 (2011) 《現代漢語語氣成分用法詞典》商務印書館
- 王曉凌 (2009) 《非現實語義研究》學林出版社
- 雅洪托夫 (陳孔倫譯) (1959) 《中國語文叢書：漢語的動詞範疇》商務印書館
- Comrie, Bernard (1985) *Tense*. Cambridge University Press.

使用データベース

Sketch Engine: <https://www.sketchengine.eu>

アクセス日時 2020 年 8 月 1 日 ~ 2020 年 8 月 26 日